

NEWS LETTER

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

65

2010
0901

いまだ厳しい残暑がつづく今日この頃、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

都市史研究会ニューズレター65号をお届けいたします。本号では2010年6月に開催された都市史研究会例会の様子と、9月以降の活動予定のご案内を掲載いたします。また、今年度より研究補助員となりました東辻賢治郎氏（東京大学大学院工学系研究科博士課程）と角和裕子氏（東京大学大学院人文社会系研究科修士課程）のご紹介を兼ね、お二方よりエッセイを寄せていただきました。なお、8月に長野県飯田市で飯田市歴史研究所と共催いたしましたラウンドテーブル「伝統都市の比較史」については次号にてご報告させていただきます。

今後とも、皆さまの都市史研究会へのご理解とご助力をお願い申し上げます。

第72回都市史研究会例会

2010年6月9日、東京大学工学部1号館建築会議室にて第72回都市史研究会例会を開催いたしました。吉田光男氏（放送大学）の著書『近世ソウル都市社会研究——漢城の街と住民——』（2009、草風館）の書評会として、評者を石田潤一郎氏（京都工芸繊維大学）、コメントを伊藤裕久氏（東京理科大学）・金銀真氏（東京大学）が担当されました。後半では吉田氏を交え、活発な議論も行われました。以下、参加記を掲載いたします。

参加記

当日は吉田光男氏の著作『近世ソウル都市社会研究』を石田潤一郎氏が評し、伊藤裕久氏と金銀真氏がコメントを行なった。まずは石田氏から本書の構成や内容の整理が行なわれ、氏の関心にもとづいた質問が挙げられた。石田氏からの質問は、近代国家への目覚めと都市における空間的事象、近世期の洞の運営管理、都市住民の雑居性や流動性に関する問題と近代以降の展開などであった。伊藤氏のコメントでは氏が実際に調査した地域や建築の図面などが紹介され、近代以降に「伝統的」とされた都市住宅について近世との関わりが言及された。さらに金氏からはソウルに関するこれまでの研究史の整理、史料の問題などが指摘された。

今回の書評会では、評者、コメンテーターともに建築史の分野から近代ソウルを取り上げてきた研究者たちであり、吉田氏が著書のなかで明らかにした近世ソウルの特質が近代のそれとどのように関係するかに強い関心が向けられていた。とくに近世ソウルにおける居住の実態は吉田氏の研究によってはじめて得られた知見が多く、これに関連した議論はとりわけ活発に行なわれていた。この際、吉田氏が強調したのは都市居住者の流動性であり、朝鮮における土地に対する意識であった。これは、日本の都市における土地所有を研究テーマとする筆者にとっても大変興味深い問題として拝聴させて

いただいた。

吉田氏によれば、近世ソウルの流動性の高さは農村部との比較から導き出されたものであり、基本的に農村部においても転入転出が頻繁に行なわれており、日本とは土地に対する感覚が大きく異なっているとのことである。さらに、このような土地に対する意識が居住地域での共同性（共同体が成立しない）とも関連し、地域史料が作成されないという状況を招いたことにも言及していた。地域での共同体の有無、それらが現在までなんらかの形で継承されているか否かは史料の作成と残存にとっては重要な条件となる。日本の都市史研究において住民個々の生活や動向の実態に迫ろうとすると、彼らが所属する家はもちろん、地縁的共同体が作成した文書も多くの詳細な情報を与えてくれる。

このような観点から考えると、限られた史料を駆使することで多くの知見を導き出した吉田氏の研究成果が如何に重要であるかが改めて痛感させられた。それと同時に、共同体が成立しない地域での生活の実態や保障のシステム、転入転出を行なう際の手続きや手法、建設行為への関わり方など様々な疑問を抱くことは禁じえない。当日の議論の場でも、伊藤氏が提示した図面と関連して「戸」の概念について議論が及んだが、狭小な面積に多くの「戸」が集住する際の実情、そのようになった経緯などは是非とも知りたいところである。

近年、建築史の分野でも朝鮮の都市や建築に興味を抱く研究者が増加しているように感じられる。とくに近代の殖民期に関しては日本にも史料が残されており、多くの論稿が発表されている。このような状況を鑑みると、近世期の都市の実態にどこまで迫れるかによって近代に対する評価も変わる可能性が秘められているのではないだろうか（石田氏の書評でも、氏が収集したデータの見直しの必要性を明らかにしていた）。史料的な限界は承知の上で述べさせていただくと、吉田氏がその著作の中で明らかにされた諸事に関して今後さらに研究が進展していくことを期待したい。

三倉葉子（東京大学大学院工学系研究科）

次回都市史研究会例会開催のご案内

2010年9月17日に第73回都市史研究会例会として、岩本馨氏（京都工芸繊維大学）の著作を取り上げて書評会を開催いたします。当日は日本建築学会、若手奨励特別研究委員会との共催となります。皆さまふるってご参加ください。

内容 岩本馨著『近世都市空間の関係構造』（吉川弘文館、2008）書評会

日時 2010年9月17日（金）18時～

場所 東京大学本郷キャンパス 工学部1号館3階315番会議室

評者 杉森哲也（放送大学）

コメント 登谷伸宏（京都大学）

ラウンドテーブル「都市史の現在、そして未来——イギリスと日本——」開催のご案内

上記、都市史研究会例会の翌日、2010年9月18日にレスター大学よりRosemary Sweet氏をお招きし、ラウンドテーブルを開催いたします。今回は坂下史氏（東京女子大学）が研究代表を務める科研（基盤研究C）「医業と農業と慈善を結ぶ「草の根啓蒙」の実相」とぐる一歩・とらっど3、都市史研究会の共催となります。皆さまふるってご参加ください。

日時 2010年9月18日 13:30～

会場 東京大学法文1号館115教室

報告1 Rosemary Sweet（レスター大学） “New questions and new directions in British urban history”

報告2 岩本馨（京都工芸繊維大学）「日本近世都市史研究の論点」

ワークショップおよびラウンドテーブル開催のご案内

2010年10月9日、10日に復旦大学の王振忠氏を招いて、ワークショップおよびラウンドテーブルを開催いたします。内容は以下を予定しておりますが、会場や報告タイトルなど、詳細は決まり次第メーリングリストまたはウェブサイトにてご案内いたします。皆さまふるってご参加ください。

王振忠氏（復旦大学）によるワークショップ

日程 2010年10月9日 13～18時

会場 東京大学本郷キャンパス内

報告 王振忠（復旦大学）

「徽州商業文書の類型及其學術価値」（徽州商業文書の種類及びその学術的価値）

「伝統商帮与経営文化—以清代徽州墨商文書为中心」（伝統的な商帮及び経営文化——清代の墨商文書を中心に——）

ラウンドテーブル「17～19世紀中国の都市と商人——徽州と広州」

日程 2010年10月10日 9:30～

会場 東京大学本郷キャンパス

報告 王振忠（復旦大学）

熊遠報（早稲田大学）

井上徹（大阪市立大学）

シンポジウム開催のお知らせ

2010年12月4日、5日の両日、本年度のシンポジウムを開催いたします。本年度は、8月に全巻刊行となりました『伝統都市』を取り上げ、各巻の書評、「伝統都市」をめぐる論点について議論を行う予定です。現在、開催準備を進めておりますので、詳細は次号のニューズレターにてお知らせいたします。まずは、概要のみのご案内です。

日程 2010年12月4日（土）午後、5日（日）午前および午後

会場 東京大学本郷キャンパス工学部2号館9階 プレゼンテーションルーム93B

テーマ 「伝統都市」

『伝統都市』（全4巻）出版のお知らせ

前号でもお知らせいたしましたが、2010年5月より『伝統都市』（全4巻、東京大学出版会）の出版が開始され、8月に第4巻も出版されました。2006年から2007年にかけ、都市史研究会例会で行われた準備報告会の成果が集約されています。上記でもご案内いたしましたとおり、本年度のシンポジウムでは、本シリーズを取り上げる予定です。

パンフレットより内容紹介と目次を転載いたします。また、本ニューズレター読者を対象といたしまして、各巻税込価格5040円より2割引でご購入いただける注文書もご用意いたしました。是非ご活用ください。

伝統都市1 イデア

都市の社会=空間は、意識されるか否かによらず、つねに特定のイデアにもとづいて企画され、また改造される。宗教コスモロジー、公権力の構造理念、市民的あるいは階級的な共同の観念・ユートピアなどが伝統都市には積層し、せめぎあう。本巻では、伝統都市を解説するキーワードとして〈イデア〉を積極的に位置づけ、都市の社会=空間に重層するイデアの解説、イデアの担い手と実行主体、そして現代都市イデアによる解体と相剋から、都市イデアを浮かびあがらせる。

目次： 序 方法としての都市イデア 伊藤毅（東京大学）

I ひろげる

- 1 移行期の都市イデア 伊藤毅
- 2 地中海都市 陣内秀信（法政大学）
- 3 都市図屏風とイデア 杉森哲也（放送大学）

II 考える

- 1 豊臣秀吉の京都改造と「西京」 三枝暁子（立命館大学）
- 2 萩城下の都市民衆世界 森下 徹（山口大学）
- 3 幕末・明治初期の横浜 青木祐介（横浜都市発展記念館）
- 4 近代移行期の東京 松山恵（明治大学）
- 5 社会主義の都市イデア 池田嘉郎（東京理科大学）

III さぐる

- 1 開京 禹成勲（七宝建設）
- 2 バスティード 加藤玄（日本女子大学）
- 3 町家 高村雅彦（法政大学）

- 4 与板 朴澤直秀（岐阜大学）
- 5 オラン 工藤晶人（大阪大学特任研究員）

伝統都市2 権力とヘゲモニー

伝統都市における支配権力や社会的権力、あるいはヘゲモニー主体の具体相をとりあげ、社会的結合論の視点から都市権力論の方法・論点をさぐる。都市の権力は、都市を基盤とする広域支配を担う権力機構、都市内行政の権力主体、社会レベルにおける私的権力のヘゲモニーなど多義的である。本巻では、個別的な都市事例を素材とし、狭義の権力構造から、権力の空間、都市社会の統合と秩序化の諸局面、および社会との相剋、移行期における変容・変革などの問題にせまる。

目次： 序 都市の権力とヘゲモニー 吉田伸之（東京大学）

I ひろげる

- 1 武士と都市 五味文彦（放送大学）
- 2 都市法 塚田 孝（大阪市大学）
- 3 革命前夜のベルリン 山根徹也（横浜市大学）

II 考える

- 1 アテナイ民主政の警察機能と市民 橋場 弦（東京大学）
- 2 君主制フィレンツェの都市改造 野口昌夫（東京芸術大学）
- 3 都市周縁の権力 高橋慎一郎（東京大学）
- 4 解体される権力 横山百合子（帝京大学）
- 5 近代中国の租界 吉澤誠一郎（東京大学）

III さぐる

- 1 バグダード 清水和裕（九州大学）
- 2 ペテルブルク 青島陽子（ITP派遣生）
- 3 長岡と蔵王 武部愛子（東京大学学術支援職員）
- 4 軍都金沢 本康宏史（石川県立博物館）

伝統都市3 インフラ

都市を巨大な人工物とみたとき、都市の骨格をなす道路や橋、河川・運河・水路などの基幹施設、都市生活の生命線となる上水道や燃料、不断の管理によって都市機能を維持する塵芥や下水の処理などが有効に稼働していることが要求される。本巻では、都市を物的に成り立たせているさまざまな局面に焦点を当て、その全工程、それを担った社会集団を念頭に置きながら、インフラのもつ空間的・社会的意味を伝統都市のなかに探り、その近現代の変容の諸相を描く。

目次： 序 都市インフラと伝統都市 伊藤 毅（東京大学）

I ひろげる

- 1 運河都市 鈴木博之（青山学院大学）
- 2 近代市街橋のデザイン 篠原 修（政策研究大学院大学）

II 考える

- 1 古代都市街路 伊藤重剛（熊本大学）
- 2 城下町 岩本 馨（京都工芸繊維大学）
- 3 藩邸 岩淵令治（国立歴史民俗博物館）
- 4 寺内 杉森玲子（東京大学）

- 5 都市再開発 初田香成（東京大学）

III さぐる

- 1 道 宇佐見隆之（滋賀大学）
- 2 穴蔵 谷川章雄（早稲田大学）
- 3 ニューゲート監獄 栗田和典（静岡県立大学）
- 4 高輪海岸 吉田伸之（東京大学）
- 5 不動産 森田貴子（早稲田大学）

伝統都市4 分節構造

都市における社会=空間構造の基盤を構成するのは多様で個性的な社会的結合体である。伝統都市において、血縁・地縁・職業・宗教・文化などのさまざまな契機によって形成される諸集団が、相互に複層的な関係をもつことによって生みだされる単位社会のあり様を抽出し、その分節的な社会=空間構造の特質について具体的に考察する。そして、伝統都市間の類型的比較を試み、あわせて、近代への移行期における分節構造の変容過程の特質を明らかにする。

目次： 序 ソシアビリテと分節構造 吉田伸之（東京大学）

I ひろげる

- 1 江戸・内・寺領構造 吉田伸之
- 2 聖俗の結合 近藤和彦（東京大学）
- 3 都市空間の分節把握 伊藤裕久（東京理科大学）

II 考える

- 1 中世ジェノバの「家」 亀長洋子（学習院大学）
- 2 近世パリの街区 高澤紀恵（国際基督教大学）
- 3 胡同と排泄物処理システム 熊遠報（早稲田大学）
- 4 近世湊町と地域特性 吉田ゆり子（東京外国語大学）
- 5 明治初年の遊廓社会 佐賀 朝（大阪市立大学）

III さぐる

- 1 ミドルマン 岩間俊彦(首都大学東京)
- 2 ベリンダ 飯島みどり（立教大学）
- 3 社家 竹ノ内雅人（飯田市歴史研究所）
- 4 浜人 山下聡一（大阪市立大学GCOE特別研究員）
- 5 囃子方 佐藤かつら（鶴見大学）

『伝統都市』注文書

A5判／上製カバー／縦組／平均320頁／各巻税込予価5040円より2割引き（4032円）

シリーズの特色

- “伝統都市”とは何か、著しい飛躍を遂げた都市史研究の到達点を示す。
- 現代都市が抱える問題の解決の糸口を歴史的根源からさぐる。
- 4つのキー概念によって時代と地域を横断し、都市と社会を読み解く。
- 日本・アジア・欧米をフィールドとする第一人者が都市を通して歴史の魅力を描き出す。

ご注文方法

- 郵便、ファックスまたはメールからご注文いただけます。
- 郵便またはファックスをご利用の方は、このページの「ご注文内容」「お客様情報」をご記入の上、郵便の場合は都市史研究センター・とらっと3事務局へ、ファックスの場合は東京大学伊藤研究室までお送りください。
- メールにてご注文される方は「ご注文内容」「お客様情報」を下記Emailアドレスまでお知らせください。

都市史研究センター・とらっと3事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 日本史学研究室内

Email: trad3@l.u-tokyo.ac.jp

Fax: 03-5841-7459（東京大学工学部建築学科伊藤研究室）

注意事項

- 送料はお客様に実費ご負担いただきますのでご了承ください。
- お支払は商品に同封する振込用紙にてお願いいたします。
- 公費でのお支払にも対応させていただきます。商品の郵送時に必要書類を同封いたしますので、「公費払い用書類の宛名」に書類に記載する宛名（大学名など）をご記入ください。
- ご注文いただいた内容は、毎週金曜日に取りまとめて東京大学出版会に連絡いたします。そのため、商品がお手許に届くまでお時間を頂戴する場合がございます。どうぞご了承ください。

ご注文内容

- | | | | |
|----------------|------------------------|-------------|---------------------|
| ・全4巻申し込みます | | (セット) | |
| ・1 イデア | ISBN 978-4-13-025131-0 | (冊) | |
| ・2 権力とヘゲモニー | ISBN 978-4-13-025132-7 | (冊) | |
| ・3 インフラ | ISBN 978-4-13-025133-4 | (冊) | 2010年7月以降のお届けとなります。 |
| ・4 分節構造 | ISBN 978-4-13-025133-1 | (冊) | 2010年8月以降のお届けとなります。 |

お客様情報

ご芳名

ご所属

お届け先ご住所 〒

電話番号 ()

公費払い用書類の宛名（公費払いをご希望される方のみ）

ムアフィールドズ小史

東辻賢治郎（東京大学）



図1. 現在のフィンズベリー・サーカス（航空写真）

ロンドン旧市の北、現在は楕円形広場を中心にフィンズベリー・サーカスとよばれている一角は、過去に低湿地あるいは沼であったと伝えられている。この土地はいつごろからか沼地 = Moore Fields と呼ばれるようになり、この呼称は19世紀まで残る地名（Moorfields）となった。沼は、2-3世紀ごろに始まったローマ人による城壁建設によってテムズ川の支流のひとつが堰き止められたために形成された、つまり、大都市ロンドンの萌芽と似つかぬ双子のようにして生まれたと考えられている。そして16世紀初頭に沼が姿を消した後もしばらくは大きな^{オープン・スペース}空地として残され、19世紀初めによく市街に飲み込まれるかのようになりサーカス（楕円形広場）という都市建築の装いを与えられ、現在に至っている。未曾有の成長を遂げる都市にありながらも長らく空地であったこの土地は、どのような場所であったのだろうか。

遡ってみると、多くの地誌は沼沢地であったこの土地が1527年に「初めて排水（干拓）された」という記録を伝えている。そして1606年には四周および十文字状の遊歩道が整備され、ロンドンで最初の公園（public park）となった。19世紀の地誌は以下の如く述べている。

この低まった土地は人々が集まることや心地よい遊歩道によって有名であった。また洗濯や漂白を行う女、棒切れで遊戯を行う者、庶民的な種々の娯楽によっても著名で、バス

レム病院として知られる精神病院、そして書籍やバラッドを売る露店によってもよく知られていた。¹

庶民との多様な接点が続く記述であるが、一方で、ロンドン史において主要な舞台としてこの土地が登場する出来事はほとんどない。日常的に市民に親しまれていたということを除けば、特筆されるのは1666年のロンドン大火の際に家を失った多くの市民がここへ向かい、仮屋を設けて雨露を凌いだということくらいである。このエピソードは密度を高めてゆくシティに残された稀少な空間であったことを伺わせる。

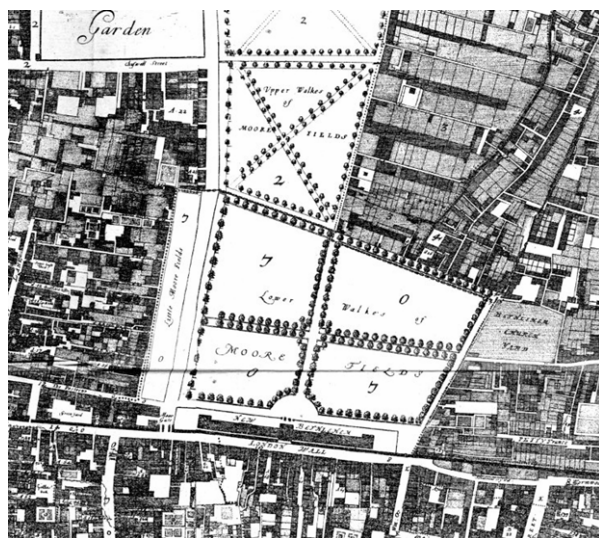


図2. 公園として整備されたムアフィールドズ（17世紀末ごろの地図）。遊歩道南側の東西に長い建築はバスレム精神病院。

その大火直後のロンドン市中には、この災厄がカトリック教徒のフランス人や当時交戦中だったオランダ人の謀略であるという流言が飛び交った。その結果としての暴力や裁判沙汰も少なくなかったことが知られているが、その中にこの土地、すなわちムアフィールドズを舞台とした挿話がひとつ記録されている。

また、別のところでは激怒した民衆がフランス人のペンキ屋の店にあった品物をすべて持ち出し、それからそのフランス人が他の物を外に運びだすのを手伝ったあと、その家をつぶしてしまった。自宅に火を放ち、火事の拡大をはかろうとしていると疑われたのである。また、兄の話によると、ムアフィールドズではあるフランス人がもう少しで八つ裂きにされるところだったという。火玉を運んでいると疑われたのだ。

¹ Peter Cunningham, *Handbook of London: past and present*, London: John Murray, 1850, pp. 344–345.

実際はただのテニスのボールだったそうだが。²

この伝聞が述べる事件の実態についてはとりあえず脇におこう。興味深いのは、この混乱の瞬間のムアフィールドズで「テニスのボール」という遊戯の道具が外国人への憎悪の導火線となったと語られていることである。そのロンドン誌の一つの章をロンドン市民の遊び場の考察に割いたラスムッセンによれば、中世以来のムアフィールドズこそは市内の若者の〈遊園地〉であり、市民はこれを自らの努力によって勝ち取り、政府はこうした市民の権利を積極的に保証してきたという³。まずはこの〈遊び〉を手掛かりに、ムアフィールドズの歴史を遡ってみよう。

実際のところ、ムアフィールドズにおける遊戯の歴史はこの土地と人間の関わりの記録のうちで最も古いところまで遡っている。古代のムアフィールドズの歴史が明らかにされたのは比較的最近の考古学の成果によるものであり、それまでの地誌記述はこの土地の「前史」として必ず次に示すウィリアム・フィッツスティーヴンの叙述を引用している。これはフィッツスティーヴンが仕えたトマス・ア・ベケットの評伝に挿入されたロンドンの描写のうち「氷上の遊戯」と題された一節であり、ここに12世紀の危なっかしい遊びの場として初めて記述の世界に登場しているのは、まさしく地名によって語られるようになる前のこの土地の姿である。

市の北面の城壁に水を湛えた広大な沢や沼〔Moore〕が凍結すると、氷上で遊ぶために大勢の若者が出かけてゆく。走って速度をつけ、横向きに大またで滑ってゆく者もあれば、石臼ほどの大きさの氷の腰掛けを作り、一人をそれに座らせて大勢の者が手を取りながら引っ張る者もある。非常に勢いがついてるので、誰かが足を滑らせるとみんな一緒に転んでしまうのである。さらにもっと氷上の遊戯に熟達した者もいて、彼らは足の裏に獣骨を縛りつけ、鉄をはめた棒を手をしている。これで氷を打つことで、飛ぶ鳥か、あるいは放たれた矢のように素早く滑走するのである。棒をもって二名で滑走し互いにぶつかり合う者もあり、彼らはしばしば転倒して、腕を折る者や脚を痛める者、ま

た頭蓋に至る傷を負う者もある。⁴

ラスムッセンは、こうした荒っぽい遊戯やレスリングといった〈スポーツ〉の場を市民が自らの権利として求めることが、同時代の西欧の諸都市と比較した際のロンドンの特質であったと述べている。冒頭に述べたようにムアフィールドズが「公園」となったのは1606年であり、これはその前年にこの地所が借地権者からロンドン市へと譲渡されたことに因る。この時に具体的に執られた措置は並木道の整備という単純なものであったが、効果は大きく、それまでどちらかといえば若者が「石や木や鉄を投げたり、ハンド・ボールやホッケーに、あるいは跳馬や闘鶏など、そういう他の何の役にも立たない無駄な遊戯に〔…〕没頭する」（エドワード三世が教練と無縁の遊戯を禁止させるよう述べた通達より。強調は引用者）場所であったムアフィールドズは、大火のころには「ロンドンの上流社会のお気に入りの遊歩場」となり、週末には「大勢の市民が一張羅を着飾って木陰をぶらぶら散歩」するような場所となっていたという。

16世紀末にジョン・ストウが著した『ロンドン誌』は、公園として整備される以前のムアフィールドズの歴史に関する古典的な資料となっているが、ストウもまたフィッツスティーヴンの記述を俗語に訳して採録した上で、この「沼あるいは湿地」は「永きにわたって荒れた、益のない原野〔unprofitable ground〕であった」と述べている⁵。



図3. 16世紀半ばの地図に描かれたムアフィールドズで遊ぶ人々

それに続くストウの記述に従って公園となる前のムアフィー

² “Autobiography and anecdotes by William Taswell, D.D.”, edited by George Percy Elliott, Esq., in *The Camden miscellany: volume the second*, 1853. 引用部分の邦訳は見市雅俊『ロンドン＝炎が生んだ世界都市 大火・ペスト・反カソリック』講談社1999年、p. 176より。

³ S. E. ラスムッセン『ロンドン物語 その都市と建築の歴史』兼田啓一訳、中央公論美術出版、1987年、第五章「遊園地の起源」。

⁴ William fitz Stephen, *Vita Sancti Thome*, c. 1173–1174. 引用は Walter Besant, *The Survey of London*, vol.9, 1911, pp. 509–510の英訳などを参考にした。

⁵ John Stow, *A Survey of London*, 1603, pp. 429–430.

ルズの歴史を辿ると、1415年にムアフィールドズに接する部分の市壁が切り開かれて新たな市門ムアゲートが新設され、その後いくつかの濠が土壌の排水のために掘削されている。しかし1477年に市壁の修繕に用いる煉瓦をここで製作した際、材料の粘土を掘った後の穴が大小の池となり、この土地は「永きにわたってさらに悪しきものに」なってしまった。1512年に再び排水が試みられるが、それでも「依然として不快な水に満ちていた」。そして1527年、ようやくウォルブルック川を経由してテムズ川まで水を逃がす水路が確保され、この沼の大部分は「堅い地面」になる。ローマ時代に市壁の建設によって行き場を失ったウォルブルック川の水が一带を池沼へ変える一因となったという事情からすれば、ようやく正常な水の流れが回復されたともいえる。とはいえ、川といってもこの時代には密集市街の足下の暗渠となっていて、「ウォルブルック川の経路は今や地下に隠れており、ほとんど知られていない」（ストウ）というものではあったが。

この干拓と公園化によるムアフィールドズの変容はこの土地の地誌を彩るドラマであり、例えば19世紀の詩人・作家ウォルター・ソーンベリー（1828-1876）は、『ロンドン今昔』に以下のように記している。

ムアフィールドズとフィンズベリーの荒れた一帯が初めて排水されたのは1527年のことである（ロンドンの徒弟たちの大いなる不興を買ったことは疑いない）。ジェームズ一世の治世には心地よい散歩道となり、ロンドン大火の後、市中が混乱していたところに建物が建ち始めた。それ以前のムアフィールドズは陰鬱な一帯〔melancholy region〕であったに違いない。隆起した小道と廃棄物の山、深く黒ずんだ水路、無臭とはいえず嫌悪をもよおすような露天の下水路。盗賊と愛人たち、自殺志願者と哲学者にうってつけの散歩道であり、ハウズ（1631）が書く如く、「改良は不可能だと思われていた」のである。⁶

徒弟らの不興を買っただろう、とは沼であったこの場所が若者の遊び場になっていたというフィッツステイーヴンの記述を念頭においたこの詩人の想像である。『ロンドン今昔』はストウらの地誌よりもよほど自由な筆致で書かれている印象を受けるが、とりわけソーンベリーが陰鬱な、という情感を抛り所にこの土地

の過去を描いていることは氣にとめてもよいかも知れない。というのは、こういったソーンベリーの連想は伝統的な文学的トポスとしてのムアフィールドズのイメージに忠実なものだからである。

文学におけるムアフィールドズを検討することは筆者の手にあまるが、ここではシェイクスピア『ヘンリー四世・第一部』の一節を紹介しておきたい。この作品はムアフィールドズが散歩道となる直前の16世紀末に初演を迎えたと考えられている。

フォールスタッフ：〔…〕いや、正直の話、けふは馬鹿に気が滅入って仕方が無いんだ、雄猫よろしくさ、まるで犬に追廻される熊みたいなのよ。

王子：それとも老いぼれライオンか恋する男のリュートといった所か。

フォールスタッフ：全くだ、さもなければリンコンシアーのバグパイプと言ひたい所さ。

王子：では、どうだね、野兎の如く、或はムーア下水の陰気そのままといふのは？

フォールスタッフ：能くもまあ人の気持を腐らせる様な譬へばかり仕込んだものだ、悪口の名人、この上無しの碌でなし、有難い王子様さ…だが、ハル、もう結構だ、軽薄な無駄口でこれ以上俺を苦しめるな。⁷

この場面でフォールスタッフは気落ちした様子の比喩を言葉遊びのように王子と交換し、終いに話題を変えようと王子をなじめるのだが、王子がとどめをさすのは「ムーア下水の陰気」＝“melancholy of Moor-ditch”である。ムーア下水（ムアディッチ）は、15世紀に排水を意図してムアフィールドズに掘られていた濠のうちの市壁に沿ったものであった。この一節は長い間シェイクスピア編集者の首をひねらせてきたという⁸。なぜ王子は「気が滅入っている」状態の比喩としてこの場所を挙げ、フォールスタッフはこれに音を上げてしまうのか。

後世の注釈の多くはこの文脈でムアディッチの名があげられる理由として、件の濠が市民の投げ込む廃物や汚物に満ちていたことを指摘している。しかし、憂鬱の比喩として単なる不潔な下水路ではなくムアディッチという固有名が挙がるのは何故か。地

⁶ Walter Thornbury, *Old and New London*, vol. 2, 1878, p. 196 ff. 引用中のハウズは17世紀の年代記作家エドモンド・ハウズ（Edmund Howes, fl. 1601-1632）。

⁷ 第一幕第二場。福田恆存訳『シェイクスピア全集6』新潮社1967年、p. 17より。一部字体などを改めた。

⁸ Bridget Gellert, “The melancholy of Moor-ditch: A gloss of 1 Henry IV, I. ii. 87-88”, *Shakespeare Quarterly*, Vol. 18, No. 1 (Winter, 1967), pp. 70-71.

理的な関係からもムアディッチからはごく自然にムアフィールドズが連想されていたため、これを考えるためにはムアフィールドズという場所の性格をも検討することが必要となるのだが、ある英文学者の指摘によれば、この対話の表現は〈ムアフィールドズを歩く〉という文学的モチーフを通じてメランコリーと結びつくという。そしてこのモチーフは同時期の他の作家の作品にも見出されている⁹。

傍証として挙げられているのは、この芝居と同じ頃に発表されたロバート・アントンの風刺詩『哲学者落書』である。この作品は惑星の運行と人間の振舞を題材にしたもので、このうち土星、すなわち憂鬱気質を司る星の節に、憂鬱をもたらすモチーフとして「ムアフィールドズを歩く」「walke More-fields」ということが登場する。

あるいは、もしそなたの混乱した貪欲な虚栄が
土星の風味を必要としているならば、
ムアフィールドズを、不満を託つ者の隠れ家を歩きなさい¹⁰

続く詩行には実際にムアフィールドズで多く見られたとされる乞食や廃兵といった存在が描かれており、これらがフォールスタッフにとっては自身の将来の姿を暗示するものとして想起されたのであろう、とこの指摘は推論している。これが「ムーア下水の陰気」についての妥当な読解であるかはさておき、すくなくともムアフィールドズが「陰鬱な一帯であったに違いない」というソーンベリーのイマジネーションが、この地についてある程度共有されていた印象と通底するものであるということは了解されよう¹¹。

因みに、邦訳ではこの固有名詞は「ムーア下水」（福田恆存訳）あるいは「ムーア堀」（坪内逍遙訳）あるいは、「どぶくろの下水道のように」（小田島雄志訳）などと訳出されている。変わったところでは「おはぐろどぶのどぶ水よろしく」（中野好夫訳、傍点原文）としたものがある。「おはぐろどぶ」もまたそれが圍繞していた吉原という場所抜きに語ることはできない歴史的な

⁹ Bridget Gellert, *ibid.* ムアディッチとムアフィールドズの不可分性は、前者の地誌記述をみても明らかである。たとえば以下を参照。Cunningham, *ibid.*, p. 344.

¹⁰ Robert Anton, *Philosophers Satyrs*, 1616, p. 20.

¹¹ 細かいことをいえば、ロバート・アントンの詩は1616年に発表されており、これはムアフィールドズに遊歩道が整えられた後である。『ヘンリー四世』はそれ以前に成立しているため、アントンの詩を手がかりにする場合は描写の年代に注意する必要があるかもしれない。いずれにせよ、この他にも〈ムアフィールドズの散歩〉を扱った文芸作品は多く、検討の余地がある。

固有名であり、この訳は地名の深みを写す試みといえるかもしれない。

ところで、エリザベス一世およびジェームズ一世の時代の演劇にみられる狂気の表象の研究は、この時代の文化的な風潮にメランコリーへの強い関心があったことを指摘している。一般的な狂気の中でも、メランコリーは卓越した感受性や知性などを備える者がその尊厳を失うことなく罹患する病という、特別な意味を与えられていた。そうしたメランコリーを初めとする狂気の舞台として演劇などに度々登場するのが、中世以来ムアフィールドズの界限で連綿と営まれてきた精神医療施設、ベスレム病院であった。つまりムアフィールドズはメランコリーについて文学的な修辞以上の因縁を有しているのである。

やや下った17世紀後半に建設された第二期ベスレム病院を飾った二体の彫像を紹介しておこう。それぞれ『狂騒』Raving と『憂鬱狂』Melancholy Madnessと呼ばれたこれらの像は病院敷地の正門の門柱に据えられ、北に広がるムアフィールドズからの訪問者を迎えていた。



図4. ベスレムの門柱の彫像（シバー作）

ヒポクラテスの四体液説以来、メランコリーは西洋の医学・哲学・芸術等において重要な位置を占めてきたが、これらの彫像が作成された17世紀の終わりごろ、医学者は病理学の対象として気質の問題に取り組み始めていた。中でも臨床神経医学の父といわれるトマス・ウィリス（1621-1675）は、憂鬱症について初めてヒポクラテスの伝統に沿わない解釈を試み、憂鬱症は躁と鬱の二相からなる狂気的一面であり、それらは「同じ火から生じる煙と炎」の如くに入れ替わるものであると述べた¹²。一対の彫像はそうした狂気の相補性が端的に表現されたものである。「ベスレム」から派生した「ベドラム」bedlam がそのまま「狂騒」を意味す

¹² Thomas Willis, *De Anima Brutorum: Two discourses concerning the soul of brutes*, translated into English by Samuel Pordage, 1683, p. 201. Willisによる原著は1672年。付け加えておくと、トマス・ウィリスは医学修行時代のクリストファー・レンが師事し、第二期ベスレム病院の建築家として建設を統括していたロバート・フックもまた若い時分に薫陶にあずかった人物であった。レンやフックはウィリスの学説を知っていたかも知れない。

る語となった如く、後世におけるベスレム病院の名声は憂鬱というよりは狂乱に彩られている印象があるが、それでも少なくとも作家の想像力においては、陰鬱な場所としてのムアフィールドズが忘れ去られなかったのは既にみたとおりである。

さてその彫像が作成された世紀の初頭にムアフィールドズは遊歩道をもつ公園として整備され、シェイクスピア時代に陰鬱の代名詞であったこの土地はまさしく煙と炎のように鮮やかな変容を遂げる。遊歩道ができた直後の1607年に発表された『ムアフィールドズの心地よき散歩道』と題された対話編は、心地よい散歩道となって市民の憩いの場となったその変貌に触発されてロンドンの美点を謳いあげたものである¹³。以下はロンドン市の政治家の歴々に宛てた献辞の冒頭。

あの心地よく悦ばしいムアフィールドズ、この街の庭園の如く、貴方様の誉れ高き御務めによって今や最も美しくなりましたところの、市民に甘い空気をもたらす愉快な地が、私をして大胆にもその真実の歴史を探し求めさせることとなりました。

本編は田舎の紳士とロンドン市民がロンドンの歴史を語りあう奇妙な対話編であり、やはりムアフィールドズへの讃辞から始まっている。

紳士：それ〔ロンドンの神話的創設〕以来、多くの主君のもとでロンドンはいよいよ美しくなって参りました。しかし私を満足させるその喜びの中でも、この美しいムアフィールドズの散歩道こそが一番です。これを成した者たちは相当の報いを受けてしかるべきでしょう。

〈ムアフィールドズを歩く〉ことの意味合いは、メランコリーへの沈潜から眩しいばかりの「心地良さ」へと鮮やかに変わる。沼地とは名ばかりの公園となったムアフィールドズは、余暇を中心とした都市の市民生活と不可分な「^{オープン・スペース}空地」として、ひとまず1815年まで続く幸福な時代を経験することとなった。

そうした市民生活を彩り、また来訪者の歓心を買ったロンドンにおける余暇体験のひとつが、先に触れたベスレム精神病院の訪問見物であった。週末の市民は友人と連れ立ってムアフィールドズの遊歩道へと向かい、公園を前景に壮麗にして異様な病院建築を

臨む。そして狂態が入り乱れる見世物小屋のようなその内部へと歩を進めてゆく。こうしたいわばひとつの「名所」体験は、都市近傍の荒地や沼沢地の開発というありふれた事例の中で、土壌改良を実現したにも関わらず依然としてそれを余暇のための空地として維持する、というこの場所の特別な事情によって準備されたものでもあるだろう。そうして、この地名はベスレム病院の代名詞とさえなっていく。



図5. ムアフィールドズの遊歩道を前景にしたベスレム精神病院（18世紀初頭の版画）

13世紀の修道院を起源とするベスレム病院はそれまでムアフィールドズの東隣に位置していたが、1670年代に大幅に規模を拡大し、ムアフィールドズの一角、かつてのムアディッチの上に建て替えられた。これが先の彫像で飾られた第二期ベスレム病院であり、医療と狂気、そして娯楽と慈善が混濁する稀なスペクタクルとして海外にまで知られるようになったことはあまりにも有名である。この体験へ赴く市民の心情をふたつばかり紹介しておこう。

ロンドンの見所とされているなかで、はじめて来た人が訪問してみたいと強く思うもののひとつにベドラムがある。ハーリーの知人は、いくつかの場所を案内した後、そこへも寄ってみようと言い出した。しかし、ハーリーはそれに反対だった。「理由は」と彼が言うには、「わたしたちの人間性を苦しめるこの上なく深刻な悲慘を、看守に心づけとしてはした金を渡すような有閑な訪問者にさらすなんてことは、非人間的行為だと思うからです。〔…〕」しかしながら、彼は、執拗に誘うその友人や他の仲間たち（そのうちの数名は女性であった）に負けて、みんなでムアフィールドズへと出かけることとなった。¹⁴

¹³ Richard Johnson, *The Pleasant Walkes of Moore-Fields*, 1607.

¹⁴ Henry Mackenzie, *The Man of Feeling*, 1771 (2nd ed.), pp. 53–54. ヘンリー・マッケンジー／久野陽一ほか訳『感情の人』音羽書房鶴見書店2008年、pp. 45–46.

こんなふうに話していると立派な大建築が見えてきたので、話題は変わり、この壮大な建物をどう思うかと相棒が尋ねてきた。「ロンドン市長の官邸かなあ。こんな威厳のある建物がそれ以下の人間のためだとは思えないからねえ」と答えると、相棒はこの無知な推測に笑って、これがベドラム、つまり狂人収容所だと教えてくれた。「確かに、頭が変な人たちを入れておくためにこんな豪華な収容施設を作った人たちは、気が狂っていたんだね」と言い返してから、自分たちの幸せがわかるお偉方がこの美しい建物の住人でないのは残念なことだと付け加えた。¹⁵

こうした「行楽地」から現在のフィンズベリー・サーカスへの変貌は建築家ウィリアム・モンタギューの手によるもので、ジョージ・ダンスによる1802年のデザインを下敷にして1815年以降に実施された。この一角は1971年にシティ内初の保存地区指定を受けた地区のひとつとなっており、楕円形広場がシティで唯一の大規模な空地であるという特質を高く買われている。

それまで、人々との関わりにおいてムアフィールドズは永らく実益と無縁な遊戯の場であり、土壌の改良後も遊歩や娯楽といった市民の遊びに供されるという性格は変わることがなかった。そして、沼地を堅固な大地へと改善するという事業は、目的はどうであれ、結果としてはその土地の経済的、政治的その他の意味での実利的な開発へ直接結びつくことがなかった。こうした、いわば常に「遊んでいる」土地であったムアフィールドズは遂に姿を消し、そのヴォイドの美点は都市の文脈に回収されることで日常の風景の一部となった。

しかし、ムアフィールドズからフィンズベリー・サーカスへの変貌に際しても、やはりそこが沼であった時代の呪縛のようなものが見え隠れする。というのは、フィンズベリー・サーカスの建設は、第二期ベスレム病院が建築から百数十年を経た後に基礎部分の重大な問題によって解体を余儀なくされたことで、初めて実現へ向けて動き出したためである。第二期ベスレム病院は、ニュートンの威光に隠れつつも当代随一の科学者のひとりであったロバート・フックが、ロンドン大火後から没頭していた建築家としての職務の一環として請け負い、その献身的な設計・監理によって建設されたものであった。

この時期のフックの日記を繙くと、クリストファー・レンと親

しかったフックは施工に必要な人材をレンの人脈に借り、またおそらくはレン本人とも相談しながらこの建物に臨んでいたことがうかがえる。仮にこのイギリス建築史を代表する「大建築家」の助言がなかったとしても、実験物理学者であり、運河の造成事業などにも携わっていたフックが建築の基礎構造に無知であったとは考えにくい。にもかかわらず、病院建築としても評価の高いこの建築が最終的に構造的な問題によって解体を強いられたということは、そこがやはり難しい土地であったという印象を与える。いずれにせよ、この解体と建設の劇を経てようやくサーカスというありふれた都市建築語彙の装いに安息を見出したこの土地は、その土星の徴を道連れに地図からその名を消すのである。



図6. ムアフィールドズから望む解体の近いベスレム（19世紀初頭の版画）

ムアフィールドズの来歴には繰り返し見え隠れするモチーフがいくつかある。ここでは触れなかったが、古代から初期近代まで埋葬地として用いられてきた伝統があり、また医療に縁がある、というこの土地の性格は現代も揺るいでいない。

本稿ではそうした様々な要素の中で、遊戯と憂鬱という漠然とした二つのモチーフを手掛りに、地名を失うまでのムアフィールドズの歴史を概観してみた。二つを導きの糸としたのは、研究の脇道に登場したこの未訪の土地に漠然と興味を抱いた筆者にとって、これらの形象が都市の「^{オープン・スペース}空」地⁶にまつわる都市民の——あるいは我々の——幻想を映したものであるように見え、そのことがこの主題のひとつの魅力であるように感じられたためである。それはさておき、時間が許すようであれば、より具体的にムアフィールドズの運命を定めてきた個々の事情を検討して、都市ロンドンの歴史にこの場所が占める位置を考えることを今後の課題としたい。

¹⁵ Ned Ward, "A visit to Bedlam", in *The London Spy*, 1698–1700. ネット・ウォード／中村裕子ほか訳『ロンドン・スパイ：都市住民の生活探訪』法政大学出版局2000年、p. 64.

群馬「粉」探訪

角和裕子（東京大学）

江戸の都市民が食べていた蕎麦やうどんは、どのようにして供給されていたのだろうか。それを考える上で重要な点の一つが製粉業である。近世後期、江戸西郊では玉川上水の分水などを利用した水車製粉業が盛んに営まれており、多くの小麦粉が江戸へと運ばれた。しかし水車製粉業は、明治になり機械製粉が普及するにつれて衰退していく。

機械製粉普及の立役者となったのが、現在の日清製粉株式会社の前身である館林製粉株式会社である。館林製粉は、明治三十三年、小麦栽培が盛んであった群馬県館林市に設立された。そこで私は、7月27～28日、近世期の製粉業や粉食文化を考える手がかりを求めて群馬へと向かった。目的地は館林にある製粉記念館と、高崎にある群馬県立歴史博物館である。

製粉記念館は、館林製粉株式会社の設立70周年を記念して開設された。東武伊勢崎線館林駅を降りてすぐ、日清フーズ館林工場の敷地内に記念館はある。工場の入り口で来訪目的を告げると、事務所の方が記念館まで案内してくださった。記念館の建物は、館林製粉時代の工場本館が使われており、全体的に地味な工場の敷地内で妙に目立っていた。

中に入ると、一人黙々とパソコンに向かって作業をしている



方がいるだけで、私以外に見学者はいなかった。展示は、製粉の歴史がパネルで紹介されていたり、近代の製粉工場の模型や工場設立時の規約書などの文書類が並べられているというものであった。企業博物館らしく、創業者の正田貞一郎の肖像や遺品、現在の日清製粉の商品も展示されていた。しかし予想はしていたのだが、近世の水車製粉に関する展示は残念ながらほとんどなかった。そもそも機械製粉の影響で、近世来の水車製粉は打撃を受けたのだから、展示がないのも当たり前かもしれない。失望と館林の暑さで少しふらふらしながら次の目的地、高崎へと向かった。

JR高崎駅から一時間に一本のバスで約20分。やや不便な所にあるためか、博物館内の人は少なかった。ここで4月から8月末にかけて行われていた企画展が「粉もの上州風土(フード)記」だ。内容は、群馬県の粉もの(粉食)を紹介するというもので、130点ほどある展示品の半数以上が粉ものの食品サンプルである。うどん、蕎麦、まんじゅう、団子、ヤキモチ、水団、かりんとうなど、ずらりと食品サンプルが並んだ様子は圧巻で、よくこれほど粉ものがあつたものだと思心する。



ところで、この展示で特徴的なのは食品サンプルの並べ方だろう。食品サンプルは、調理方法ごとに分類して展示しており、調理が簡単なものから順番に並べられているのだ。展示室に入っただけにあるのが蕎麦掻。蕎麦掻は「熱湯を加えて掻く」だけで出来るとても簡単な料理だ。一方粉ものの代表とも言える蕎麦やうどんは、最後の方になってやっと登場する。それもそのはず、作り方は「こねる→のばす→切る→ゆでる」という手順を踏まなくてはならないのだ。麺類は非常に手間がかかる料理だったのである。

展示を見ていてふと思い出したことがある。江戸で古本屋を営んでいた藤岡屋由蔵が、見聞きたことを編年体でまとめた『藤岡屋日記』の中にある「蕎麦掻を食し相果候一件」(慶応二年二月)という記事だ。

あらすじはこうである。ある日、武州荏原郡下北沢村(現東京

都世田谷区)の森巖寺に盗人が二人入った。盗人は、寺の和尚が無尽に当たって得た金を目当てにやって来た。ところが和尚は、無尽金は村の名主の所へ預けてあるという。盗人は、それでは名主のところに案内しろ、だがその前に腹が減ったから何か食べる物が欲しい、と和尚に要求した。和尚は、ちょうど前日に名主から贈られた蕎麦粉があるからと言って蕎麦搔にして盗人に食べさせたところ、盗人たちは死んでしまった。どうやら蕎麦粉に毒が入っていたようで、名主が和尚の無尽金を横領しようとしていたのではないかと、という話。

私がこの記事を読んで興味を引かれたのは、蕎麦(麵)ではなく蕎麦搔にしたということだ。最初に読んだ時は、江戸市中では盛んに蕎麦が食べられていたのに、農村(下北沢村)では蕎麦搔なのか、と単純に考えた。つまり、都市と農村では食べるものが違うのはもちろん、原料が同じでも調理の仕方が違うのだと考えたのである。しかし、この記事で肝心なところは、これから盗みに行かなければならないという忙しい時に、手間ひまかかる蕎麦を作るはずがない、ということだ。同時に、その様な手間ひまかかる料理を、農作業で忙しい農民が作るはずはなく、江戸の人々が頻繁に食べることができたのは、市中に数多くの蕎麦屋や蕎麦売りがいたからなのだと改めて思い至った。

さて、旅行の二日目は粉から離れて富岡製糸場へ観光に行った。製糸場についてここでいろいろ述べることはしないが、お昼に製



糸場前のお店で食べた上州名物おつきりこみは特筆に値する。おつきりこみは、うどんを太く平たくしたような形で、うどんのように茹でずにそのまま煮込んで作るのが特徴だ。このため麺の表面についた粉が汁に溶け込み、汁にとろみがつくため体が温まる。また、具沢山であるのは貴重だった小麦粉を節約するためであったという。本来は冬の料理であるが、暑い中食べる熱いおつきりこみは格別おいしかった。家へのお土産には、これまた粉ものの磯部煎餅を買った。

近世の製粉業を考える手がかりこそ得ることはできなかったものの、粉ものの偉大さを感じた二日間であった。

News Letter 都市史研究 Vol. 65
2010年9月1日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
編集担当：三倉葉子（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）